
白雪邸殺人事件（出題編）

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪邸殺人事件（出題編）

【Nコード】

N2108S

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

絶海の孤島に、ひっそりとたたずむ美しい豪邸。そこで催されたオフ会に招待された六人の泊り客は、思わぬ事件に巻き込まれていく。途中、読者への挑戦を挿入した、本格推理小説。

1・こびと島（前書き）

登場人物

ユーノ（Uno）	白雪姫（スノウ・ホワイト）
ドク（Doc）	先生（ドック）
シド（Sid）	おこりんぼ（グランピー）
ポチ（Pochi）	くしゃみ（スニージー）
ココ（Coco）	ねぼすけ（スリーピー）
モネ（Mone）	てれすけ（バッシュフル）
二階堂真澄	ごきげん（ハッピー）
クリン（Kurin）	おとぼけ（ドーピー）

目次

1	こびと島
2	白雪邸
3	六人の泊り客
4	密室の中の変死体
5	残された手がかり
6	第二の事件
7	読者への挑戦

> i 2 2 2 7 1	> i 2 2 2 7 1
— 2 9 8 2 <	— 2 9 8 2 <

白雪邸見取り図が表示されない場合は、こちらのページから入ってみてください。

<http://ncode.syosetu.com/n2108s/>

1・こびと島

朝方は穏やかな晴天であつたのだが、午後になるとねずみ色の濃い雲が空一面をおおつて、風はいちだんとひどくなつた。予報によると、間もなく強烈な低気圧が、日本列島に接近するらしい。一行をのせた小型のクルーズ船は、波に漂う木の葉のごとく、激しい上下運動をくり返していた。

船内には三人の乗客がいた。ひとりにはラフな格好をした小柄な若者で、もうひとりとは太った青年、そして最後のひとりは大柄で筋肉質の男であつた――。

狭くてじつとりと暗い客室で、小刻みにリズムをとっていたチビの若者が、不意に顔をあげると、ぐるりとまわりを見まわした。やがて、何かを悟つたかのようにため息をひとつ吐くと、ボソツと愚痴をこぼした。

「どいつもこいつも、しけたつらしてやがる。あーあ、この船にはユーノ（Uno）はいないか……」

チビの旅行の目的はただひとつ――、ユーノに会うことだ。

憧れのユーノから招待状が届いた時には、柄にもなく心がときめいてしまった。暇な学生身分でもあるチビにとって、多忙ゆえにせつかくの招待を辞退申し上げるなどという発想は、すずめの涙ほども浮かぶことはなかった。

チビの鋭く尖つた眼が、部屋の片隅にいる男の前で止まつた。さつきからずっと気分が悪そうにうずくまっているデブ――。船酔いが相当ひどいらしい。見た目は三十過ぎのサラリーマンといった所か。やつを見ていると、こつちまで吐きそうになつちまう。

そつといえ、もうひとりいたプロレスラーみたいな大男は、さつさと甲板に出ていってしまったな。こんなに海が荒れているのに、

あいつも妙なやつだ。

それにしても、この船のエンジン音は、あいもかわらず、うつとおしいな……。

チビは、ヤンキースのロゴ入りメッシュ帽を深くかぶり直して、天井の照明の灯から両眼を保護した。そして、ヘッドホンから流れ込むパンク・ロックのポリリズムを、さらにもう二段階大きくした。

青白い顔でうずくまっていた青年医師は、ずり下がった眼鏡を右手中指で押し上げると、けしからんというすぐさで顔をしかめた。正面にいるチビの学生のヘッドホンからもれ出す金属音が、さつきからどうにも我慢ならないのだ。本来なら怒鳴り散らしてやりたい所であるが、あいつもリリースのメンバーのひとりに違いない。こんなくだらないことで、いざこざは起こすわけにもいかないと思った。それにしても、この船の揺れは常軌を逸する。乗船前、念のために服用した酔い止め薬も、効果が全く感じられない……。

青年医師が今回の旅行を決断した理由は、ひとつはリリースのリーダーであり、また象徴でもある女性——ユーノに会うことだった。リリースとは、『永遠の剣』というインターネット上で展開されるオンラインゲームの中で、有志が募って創設された、とあるグループ名である。絶対的平和主義をかげ、ゲームの中での対人戦闘はいっさい禁止をし、初心者には優遇しながら、誰かれ問わず入会を希望する仲間は受け入れる。このようなスタイルで活動続けるリリースは、いわゆる典型的な友和グループであり、そのリリースの創始者がユーノであった。

しかし、青年医師の目的はそれではなかった。彼にはもうひとつの目的があった。ややもすると、彼の人生を左右しかねないことになる由々しき事件——。この旅行を拒否するという選択肢は、すでに残されていなかったのだ。

筋骨隆々の大男が甲板にいた。たくましい両腕を組みながら、進

行方向をじつと見つめている。こんなひどいしけでは、この程度の小型クルーザーなんてひとたまりもない。立ってられないほど船は揺れまくり、とび散った潮のしぶきは熱帯のスコールのごとく甲板にふりかかってくる。ふたりいる乗組員も運転室に引きこもってしまい、ここには彼しかいなかった。しかし、こんな過酷な環境でも船室にいるよりはずっとましだったのだ！ マナーが悪いチビと、今にも嘔吐しはじめそうなデブ――、やつらといっしょになってじつと我慢しているくらいなら……。

彼は本名を石堂薫^{いしどうかほる}といった。そして、『永遠の剣』の中で彼が用いているユーザー名は、シドだった。シドとは、中学時代の彼のあだ名でもあった。

シドはこの夏に三十五歳となる。あまり人との会話は好きではないし、ましてや得意でもない。この性格は『永遠の剣』というオンラインゲームの中でも、そのまま反映されていた。

ヴァーチャル世界の中で、シドはリアルでのストレスやうつぷんを晴らすのごとく、好き勝手な行動をとりまくった。暴力でほかのプレイヤーを襲っては殺し、そいつのもち物を略奪する。しだいに孤立していき、気がつく^{きがつく}と信頼できるものは、みずからの戦闘力をしめす数値だけになっていた。第一級のおたずね者になり下がったシドは、多額の賞金稼ぎのために彼の首を狙う偽善プレイヤーたちとの戦闘に、日々のエネルギーを費やさざるを得なかった。

やがて、シドはユーノと出会った。その場所は、『永遠の剣』の世界の中でも有数の危険エリアであったのに、ユーノは戦闘用スーツを全く装着していなかった。今、この女を襲えば、たやすく殺すことができる！ その時、ユーノもシドの存在に気づいていた。シドの表示されている名前の色が赤くなっていた。それは、彼がおたずね者の危険な殺人プレイヤーであることを示すものだった。しかしユーノは、その場から全く逃げだそうとはしなかったのだ。

「どうしたの。殺したければ殺していいのよ！」

思いがけなく意外な言葉が、ユーノの口から発せられた。会話下

手のシドであつたが、思わず問い返していた。「あんだ、俺が怖くないのか？」

「あなた、どうして人を殺しちゃうのかしら？」

シドの脅しにもかまわず、彼女は落ち着き払っていた。彼女が奏でる言葉のひとつひとは、それまでシドが誰からもかけられたことがない慈愛に満ちたものであった。

ユーノと出会ったこの日から、シドは人殺しを止めた。ユーノは優しいだけでなく、とても聡明な女性でもあった。知らず知らずのうちに彼女が創ったリリスというグループに、シドも加入していた。そこには多種多様のプレーヤーたちが集ってきた。誰もがユーノと会話をかわすことを楽しんでいた。

そんなある日、ゲームで登録してあるメールアドレス宛てに、ユーノからの案内状が送られてきた。日頃お世話になっているリリスのメンバーたちが、リアルの世界でおち合つて、仲よく語り合う、いわゆるオフ会というものを催したい、といった内容であった。メールにはオフ会が行われる場所と日時が記載されていた。リリスのメンバーなら誰でも参加は自由で、参加者の宿泊場所はきっちりと確保されている。さらには全員の旅費の一部をユーノが負担する、という壮大な内容であった。リリスでのちよつとした噂話によると、ユーノはリアルの世界では、あるベンチャービジネスを起業して成功をおさめている才女であるとのことだった。

メールで指定された場所は、なんと太平洋の離れ小島だった。案内状の指示にしたがつて、シドは名古屋港ガーデンふ頭にやってきた。そこには一台のクルーズ船が停泊していた。目的地は伊勢湾をぬけた所にポツンと浮かぶ『こびと島』という名の孤島である。数年前、あるひとりの富豪が島をまるごと買い取り、現在は私有地になっている――、との説明が案内状に記載されていた。

とにもかくにも、あのユーノに会えるのなら、どんな犠牲を払うこともいとわない！ シドはこの旅行に参加したことに、みじんの後悔もしてはいなかった。

突然、船内アナウンスが流れた。

「乗客のみな様、まもなく本船はこびと島に到着いたします——」
登山用の大きなリュックサックを背負って、チビが一目散に甲板にかけ上がってきた。「おー、もうこんなに近づいたんだ！ おじさん——、あれがこびと島だね？」

おじさんと呼ばれたシドはかなりムツとしていた。

こびと島は、むき出しの玄武岩でまわりを取り囲まれた要塞のような島だった。島全体が亀の甲羅のような形状をしていて、甲羅の頂上には白い建造物が小さくポツンとたたずんでいた。

クルーズ船は、島の周囲を時計まわりに、ゆっくりと旋回していた。島の南側の海岸は、いつもならば、それは美しい砂浜になっているのだろーと思われるが、あいにくの曇り空で、今は物憂げな雰囲気をもし出しているに過ぎなかった。西岸までやってくると、ひなびた簡素な波止場が見えた。クルーズ船は無事にその波止場に到着した。

2・白雪邸

波止場では、真っ白な髪と口ひげをはやしたタキシード姿の老紳士が立っていて、一行を出迎えた。

「こびと島へようこそ。長い船旅で、みなさん、さぞかしお疲れのことでしょう」

真っ先に船から下りてきたのはチビであつた。「ひどい海だったよ。こんな船旅は二度とごめんだね」

「それは申し訳ありませんでした……。わたしはみな様のお世話をさせていただきます二階堂です。どうぞよろしくお願いいたします」といふと、老紳士は丁重に頭を下げた。「失礼ですが、ゲームでのお名前をお伺いしたいのですが……？」

「ああ、俺？ ポチ——」と、チビは素っ気なく返事した。

「ポチ様ですね。ではこのバッジをお召しください」

老紳士が差し出した右手にのつていたものは、『Pochi』と大きく書かれたネームプレートであつた。

こんなダサイものを——、と一瞬、戸惑いの表情を見せたものの、チビはしぶしぶ渡された名札を左胸に取りつけた。

老紳士は、続いて下船した眼鏡をかけた来客に声をかけた。「お名前をお願いいたします」

「ええっ、本名を——？」問いかけられたデブは真っ青になった。

「失礼いたしました。わたしはゲームで使われているお名前を伺いたかっただけでして……。ここではリアルなプライバシーを公開する必要は全くございません」

「ああ、そういうことですね。びっくりした……。ぼくは——ドクです」

老紳士は、太った青年医師に『Doc』と書かれた名札を手渡した。

すると、ポチが突然くしゃみをした。

「なんか、鼻がむずむずするな……」といって、ポチは右手の親指と人差し指で鼻を押さえた。

「シド『Sido』です。どうぞよろしく」と、最後に下船した筋肉質の男がいった。

乗客がひととおり下船し終わるのを見計らってから、船員の片方が老紳士に声をかけた。「それでは、二階堂さん。あさつての朝、ここにお迎えにあがればよいですね？」

「さようでございます。帰りは六名のお客様が乗船されますので、くれぐれもよろしく願います」と、老紳士が答えた。

その後、一行は老紳士を先頭にして、小高い丘の斜面に造られた九十九折りの白い石段を、ゆっくりとのぼっていった。丘のいただきには、まるでカリブ海にある白い教会を思わせるような優美な建造物がたっていた。

「あれが白雪邸（しらゆきてい）です」

二階堂氏の説明に、すかさずドクが首をかしげた。「雪？ この近辺にも雪が降るのですか？」

「おっしゃるとおりですね。この島に雪は降りません。この建物は、もともと白砂邸（しらすなてい）と呼ばれていました。島の美しい砂浜にちなみましてです。しかし、この島を買いとられた時に、ユーノ様が白雪邸と改名されたのです。彼女はデイズニーがたいそう好きでして……」

「なるほどね。どおりでデイズニーのキャラクター像があちこちに置いてあるわけだ。くしゅん！」と、ポチがまたくしゃみをした。

「ポチ様、お風邪を召されましたか？」

「ううん、たぶん花粉症だろう。俺、ブタクサのアレルギーなんだ。くしゅん！」

「おお、それは、それは——。早く邸内にまいりましょう」

たしかに、庭園の池のほとりや、小道の脇には、アリスやくまのプーさん、ミッキーやDonaldの彫像が点々と置かれていた。

急に、鉛色の空から小雨が落ちてきた。みながあわてて手渡され

た傘をさした。

「あいにくのお天気ですね。さあさあ、玄関まではもう一息ですよ」と、老紳士がみなにはっぱをかけた。

こびと島にひっそりたたずむ白雪邸は、直線を基調としたジャコビアン様式の二階建ての建造物で、その大きさは小学校の校舎を思わせるほどであった。建物を上空から望むと丁字の形状になっていて、丁のたて棒の末端が玄関口となっている。

ようやく、長い丘を登り切ると、そこには自生の芝生が生い茂った美しい庭があった。芝生の地面から、十段ほどの大理石階段をのぼると、上は広いテラスになっていて、クラシックな白いロッキングチェアがふたつ並んでいた。複雑な模様が刻まれた四本の円筒柱が、重厚な玄関口の屋根をがっしり支えていて、その奥には、葡萄の実と蔓の図柄のステンドグラスをはめ込んだ、荘厳な両開きの玄関ドアがあった。

邸内にはいると、三人の来客はさらに眼を丸くすることになる。玄関のホールは吹き抜け構造になっており、その天井は果てしなく高くなっていた。廊下の長い壁は純白で、床に敷かれた絨毯は薄桃色であった。薄暗い山吹色の照明がしっとりとした雰囲気演出している。

一行は白雪邸の丁字のたて棒を下から上に向かって進んでいった。この動きは、方位でみると北から南へと進んでいることになる。

両サイドの純白の壁には、レコードのLP版ジャケットが、まるで絵画のように額に入れて飾られていた。よく見ると、ビートルズの歴代アルバムが全て並んでおり、それ以外にも、ジョン・レノンやウィングス、メリー・ホプキンやビリー・プレストンなどの有名ミュージシャンたちのジャケットがところせましと陳列されていた。「いまどき、LP版ですか……」と、ドクが感心してうなずくと、「はい、ユーノ様がここを買いとられる以前に見えたあるじ様のこ

趣味でございます」と、二階堂氏が説明した。

廊下の中央までやってくると、豪華な円筒形のシャンデリアが遙か頭上で煌びやかに輝いていた。そしてその真下には、ひとりの少女とそのまわりを無邪気に戯れるたくさんの小さなおとこたちの陶器の彫像が、陳列してあった。

『Schneewittchen und die sieben Zwerge』と文字が彫り込まれた真鍮板が、巨大な台座に貼ってあった。横文字をじっと見つめていたポチが、

「白雪姫と七人のこびと——、か？」と呟いた。

ひととき目立つ白雪姫の像は、背丈が人間の子供とほぼ同じくらいあり、顔は極めて精巧につくられていた。西洋のアンティーク・ドールのような白い肌は、陶器という限定された素材にもかかわらず、息をのむほど見事なりアリティがあった。能面のような冷たい表情は、足もとで戯れるこびとたちを優しく慈しむというよりは、なんともいいようのない鮮烈な妖美さを、見るもの全員に誇示するように思えた。

それとは対照的に、こびとたちは、銘々が無邪気で勝手気ままなかつこうをとっている。みな、鼻がぶざまに膨らんでいて、まるで宮廷に仕える道化のように、いやらしくにやけていた。白雪姫を崇拜するように見つめているもの、丸い鼻眼鏡をかけているもの、大きな耳でひとりだけあごひげを生やしていないもの、まつ毛が長いもの、ふてくされているもの、無気力な顔をしているもの、鼻が赤くはれ上がっているもの、がいた。それらは、およそ愛らしい天使エンジェルという感じはしなかった。どちらかといえば、鉤つき尻尾をはやした小悪魔インプというイメージのほうが、しっくりいった。

彫像の脇を擦りぬけると、すぐ廊下はつきあたりになっていて、そこから丁字の横棒に相当する長い廊下が、東西両方向にのびている。つきあたり三叉路の真正面には、大広間と呼ばれる大きな部屋への扉があった。

のちになされた二階堂氏の説明によれば、白雪邸の丁字の横棒部分は二階建て構造になっていて、一階は、大広間を東西の中心として、そこから東に向かって順に、火炎の間、月光の間、太陽の間という三つの小部屋が並び、その先には二階へあがるためのエレベーターがある。大広間から西側の方向には、清流の間と呼ばれる小部屋があり、その先は食堂となっていた。

二階堂氏がコホンとひとつ咳をした。「みな様の宿泊されるお部屋をお伝えいたします。ええと、ドク様は太陽の間、シド様は月光の間、そしてポチ様は火炎の間にお泊りいただきます」

それを聞いたポチは「ええっ、そんな居心地悪そうな部屋はごめんだよ!」と、なさない声を発した。

「これは失礼いたしました。たまたまお部屋の名前がそうになっているだけで、中のつくりはどの部屋も同じでございますよ」

老紳士がにつこりとほほえむと、ポチは無邪気に安堵のそぶりを見せた。

「それから、白雪邸の正面玄関のドアですが、夜の八時から朝の五時までは自動で鍵がロックされるように安全システムがセットされておりますので、夜間に建物からは外出されないようご注意くださいいたします」

うしろから巨漢のシドが「ほかに宿泊客はいますか?」と、手をあげた。

「はい、みな様のご到着前に、すでに三名のお客様が見えておりますよ。『永遠の剣』で使用されているお名前は、モネ(Mone)様、ココ(Coco)様、それにクリン(Kurin)様の三人です」

「ああ、クリンも来ているのか。あいつの素顔はいったいどんなやつだろう?」ポチがボソツと呟いた。

「その方々が泊まっている部屋は?」と、こんどはシドが問いかけた。

「ええと、ココ様は清流の間、クリンさんが森林の間で、モネ様が

黄金の間にお泊りですね」

「なるほどね。部屋の呼び名が曜日に対応しているのか。じゃあ、このほかに泥の間なんて部屋が、きつとあるのだね？」と、ポチが得意げな顔で指摘した。

「はい、泥の間ではございませんが、大地の間というお部屋がございます。ご予約ではスカル（Skull）様がそこにお泊りされるはずでしたが、どうも用事で来られなくなったみたいですね」

すると突然、ドクがうなるような声で叫んだ。

「なんだって！ スカルが来ない？ そ、そんな、ばかな……」

みなが一斉に振り向いた。それに気づいたドクは、きまり悪そうに下をうつむいた。

「ユーノさんは……？」と、心配そうな顔をして、シドが訊ねた。

「ユーノ様は、今日の夕刻に到着予定でございます。どうしても片づけなければならぬ急な用事が生じたらしく、少々遅くなるようです」

二階堂氏の答えにシドはホツとした表情を見せた。

「荷物をご自分のお部屋に運ばれたら、広間にお集まりください。すでにお泊りのお友だちがお待ちですから。それから、申し訳ありませんが、それぞれのお部屋の扉にはチェーンロックしか取りつけられておりません。貴重品の管理は各部屋に置かれている小型金庫を利用してください」

「戸じまりがチェーンロックだけとは……。いささか不用心ですね」と、ドクが指摘すると、

「申し訳ありません。白雪邸はもとと宿泊目的でつくられてはいないので、白雪の間と書斎をのぞいた部屋には、鍵の類は何も設置されていなかったのです。ただ、ときどき見えるお客様の要望もありまして、最低限の設備をあとからつけさせていただきました」

それを聞いたシドが、「そんなのどうでもいいよ。ここの泊り客に、もの盗りをする悪いやつなんかいないさ」と、楽観的に断言し

た。

ポチ、シド、ドクの三人は、銘々の宿泊部屋にわかれていった。

シドの宿泊部屋は月光の間だ。ドアノブをひねると、扉は容易にあいた。二階堂老人がいつていたように、チエーンロックが装着されているだけで、扉に鍵穴はなかった。そこは心地よい広さのワンルームであった。はいってすぐ左手には、トイレ付きのユニットバスがあった。そのほかには、ベッドと木製の荷棚くらいしかめばしい家具は見あたらず、テレビやラジオなどの娯楽機器類は何もなかった。ベッドの脇には聖書が置かれ、さながらホテルのシングルルームのようであった。二階堂氏の説明にあった小型金庫もすぐに見つかった。シドは財布と身分証明書、カード入れやキーホルダーなどのひととおりの貴重品を入れて、金庫の鍵をしめた。鍵には長さが十センチほどの棒状の透明なプラスチック片がついており、『月光』と文字が彫られていた。

部屋の南側に大きな窓があった。あけてみると、広大な芝生の丘の向こうに、荒れ狂う海と白い砂浜が見えた。ここは一階なのだが、それでも窓の下は舗装された地面まではかなりの高低差があつて、気楽にとびおりてやろうなどという気は、さすがに起こらなかった。天気がよければ、さぞかし壮大な景観なのだろうな、とシドは感想を持った。

広間に行く前に、邸内を探索してみたくなつた。シドは月光の間を出ると、広間とは反対の東側に向かつて、廊下を歩き出した。

月光の間の東どなりは、ドクが泊まる太陽の間だ。扉の構造から察するに、太陽の間もシドの月光の間と全く同じ造りであろうと推測される。さらに先に進むと、エレベーターがあつて、すぐに廊下はつきあたりになる。そこには、非常口と表示されたドアがあつた。シドはドアに手をかけてみた。するとドアは簡単にあいた。

風がビュツと吹き込んできたので、シドはあわててそとに出ると、

急いでドアを閉めた。

ドアのそこには避難用に設置された鉄筋の非常階段があった。どうやらそれは二階へと通じているらしいのだが、階段は三度にもわたって折れ曲がっていて、通常の建造物における二階へあがる階段と比べてみても、それは遥かに長いものであった。

「白雪邸の天井の高さは、異常だからな……」と、シドはひとりで納得した。

もう確認することは済んだということで、邸内へ戻ろうと、シドはドアノブに手をかけたが、ノブは全く動かなかった。一瞬、困惑したが、シドはすぐに状況を察した。この非常口のドアは、建物の中からであれば、ノブはまわして開閉が自由にできるのだが、そこからはノブがまわせない構造となっている。いわゆる、一方通行のためのドアなのだ。

そのまま非常階段をのぼると、予想どおり二階にも同じように非常用のドアがあったのだが、案の定、このドアノブもそこからまわすことができなかった。仕方なく、シドはふたたび階段を下までおりた。

相変わらず、そとは低気圧による暴風がびゅうびゅうと吹き荒れている。

一階の非常ドアの前に戻ってきた時、シドは足元に落ちているある物体に気づいた。掌に拾いあげてを確認すると、それがなんのためにそこにあったのかを、シドは正確に察することができた。満足したシドは、落ちていた所にその物体をもとどおりに置いた。

庭から眺めて初めてわかったことだが、白雪邸の廊下の窓は、たとえ一階とはいえ、地面からは遥か上方にあり、仮に窓があいていたとしても、よほど優秀なロックライマーでもなければ、窓から邸内に忍び込むことはできそうもなかった。結局、シドには庭を横断して正面玄関まで歩くことしか、邸内に戻る方法は残っていなかった。

中庭にはクリーム色をした巨大な貯水タンクがふたつあり、さら

にボイラー室と表札に書かれたコンクリートの四角い平屋があった。それらを横目に足早に歩き続けると、ようやくのことで玄関までたどり着いた。

邸内にはいつて、シドはまず強風で乱れた頭髪を手ぐしでなおした。白雪姫とこびとの彫像の前までやって来ると、二階堂老人が熱心に彫像を拭いていた。

「すみません、二階堂さん」

「なんででしょう？」

「白雪邸の非常口ですが……」

「ああ、ご注意ください。うっかり出てしまうと、中に戻れなくなってしまうですよ」

「そのようですね。今、さっそく、締め出されてきました」と、シドは頭を掻いた。

「それは、それは、真に申し訳ありませんでした」

「ところで、二階堂さん。この建物の出入り口って、全部でいくつあるのですか？」

「ええと、正面の玄関のほかには、一階と二階の廊下の東端と西端それぞれに合計四つの非常口がございます。非常口はいずれも、中からそこには出られますが、そこから中へはいることはできなくなっております」

「わかりました。どうも、ありがとう」礼をいって、シドは二階堂氏と別れた。

しかし、大広間の前に来ると、たまたまそこをぶらついていたボチに発見されてしまった。

「やあ、マツチヨのおじさん——、何をしてたんだい？ もうみんな、広間で待っているよ」

こうなるとさすがに逃げようがない。シドは探索を断念して、ボチのあとをすごすごついていった。

3・六人の泊まり客

大広間には、白雪邸の泊まり客が全員集っていた。小生意気なポチ、デブでだらしないドク、のほかに、さらに三人の男女がそこにはいた。

ひとりとは色黒のスキンヘッドで、ずる賢そうな顔をした、やせ男だ。シドよりもすこし年上のように見える。

そのスキンヘッドが、さっきからべたべたと寄り添っているのが、メイド姿をした娘だった。品のよさそうな小顔の美人で、明らかにほかの泊り客よりもひときわ輝いていた。長い髪は明るいミルク紅茶色に染められていて、表情はまだあどけなかった。ひよつとしたら十代なのかもしれないぞ、とシドは思った。それにしても、なぜコスプレ紛いのゴシックなメイドの衣装などを身にまとっているのだろうか？

そして、最後のひとりは、ショートボブカットのすらりとした女だった。メイド姿の娘と比べると、じみなメイクで無表情だが、どこか知的な雰囲気をもし出している。彼女は、ひとりだけすこし離れた所で熱心に文庫本を読んでいた。

スキンヘッドがシドに気づいて、傍にやってきた。

「やあ、あなたがシドさんですね。わたしはクリンです。その名のとおり、リアルでも禿げ頭なんですよ」そういうと、スキンヘッドは不ぞろいの歯を見せて笑った。「それでもまだ歳は二十九なんやけどね……」

クリンはシドに握手を求めてきた。両耳には髑髏をかたどった金色の大きなピアスが光っていた。クリンとは人気少年漫画雑誌のドラゴンゼットに登場するスキンヘッドのユニークキャラの名前である。シドが右手を差し出すと、クリンはいさつ代わりのつもりか、渾身の力を込めて握ってきたので、シドも遠慮なく握り返した。

「そちらの女性がココさん。私立高校の先生をされているそうです。

それから、こちらのメイド服のお嬢さんがモネさん。本業はなんとネットアイドルだそうですよ——」

シドから握り返された右手を痛そうに振りながら、クリンはふたりを紹介した。ココは、一瞬、シドに目を配ったが、かすかに頭をさげただけで、ふたたび本を読み出した。

メイド服の娘は、アンティークなひじかけ椅子から立ちあがると、両手を前に組みながら端正な足どりで、ゆっくりとシドの方に近づいてきた。シドはドキツとした。

「はじめまして、シドさん」と、娘はかわいらしいアニメ声を出して、につこりほえむと、品よく頭を下げた。「モネと申します。ネットのブログでも白雪萌音^{しうゆき もね}の名前で活動させていただいております」

そういつて、娘はまた椅子に戻っていった。シドの鼻孔には、彼女の身体から放たれた甘酸っぱくてやわらかな香水の匂いが、ふつと薫ってきた。

わきからなれなれしく、「ねえねえ、モネちゃん。ネットアイドルって、いつもは何をしているの?」と、ポチが訊ねた。

「はい。某プロダクション会社に所属していて、ふだんはインターネットでブログを更新したりします。時々、写真会のモデルやイベントのコンパニオンなどのお仕事をいただけることもありますよ」と、娘はかすかに首をかしげながら、につこりとほえんだ。

「いやはや、まだお若いのにしゃべりかたがしっかりされてみえるよね」と、クリンが感心してうなずいた。

「モネちゃんがこんなかわいいアイドルだって知っていたら、もっとゲームの中でいろいろ教えてあげたのになあ……。これからよろしくね」ポチはうれしそうに鼻を伸ばしっぱなしだ。

「そうですね。あたしゲームの中では、ユーノさんにしか、あたしのお仕事のことは話さなかったように思います」といつて、モネは細い両肩をさらにすぼめた。

ふたり分のスペースを確保してソファアを陣取っていたドクは、

さつきから会話には無関心なそぶりを貫いていたが、白雪萌音のことは相当気になるらしく、横目づかいにモネを絶えず観察していた。下心まる出しだな……、とシドは腹の底で思った。

「ええと、スカル様がお見えにならないので、あとはユーノ様がいらつしゃれば、全員おそろいということですね」と、二階堂氏がここにこしながらいった。

「えっ、大地の間の泊まり客は来ない、ってことなの？」と、ココが顔をあげた。「じゃあ、二階堂さん。あたし、今晚から大地の間に泊まってもいいかしら？　だって、あたしが泊まった清流の間って、この部屋の隣じゃない。きのうはその酔っぱらいがうるさくて、ちつとも眠れなかったんだから！」と、ココはクリンを睨んだ。「さようでございますか。もちろん、かまいませんので、お荷物を大地の間に移動してください」と、老人はいった。

ココはパタンと本を閉じると、満足そうに広間から出て行った。ポチが老人に眼を向けた。「二階堂のじいさんは、ユーノに会ったことあるの？」

「はい、ございます」

「で、どんなひと？　ユーノって」

「ユーノ様は、お若くてとても聡明なお嬢様でございます。まだ、三十前だと思いますが、ビジネスで成功をおさめられていて、ゲームはその合間になされているとおっしゃっていました」

すると、シドが恥ずかしそうに顔を赤らめながら、「どうでもいいことなんですが、あのお……、美人ですか？」と訊ねた。

二階堂氏は優しくほほえんで、「はい、細身で背が高い美人でございますよ。それでは、わたしはみなさんのお食事の準備をいたしますので……」と答えた。

「じゃあ、あたしもおじいさんのお手伝をします——」と、メイド服のモネが、老人のあとをついていった。

結局、広間にはシド、クリン、ポチ、ドクの、男四人が残された。

ため息を吐いてポチが、「ちょっと、やばくない？ モネちゃん――、かわい過ぎるよな……」と呟くと、

「ポチ君もそう思うん？ 俺も全く同感やで！」とクリン。

シドは自分自身に語りかけるように、「たしかに、モネさんは若くてきれいだけど、俺はユーノさんに期待をしたいね……」といった。それを聞いたクリンがあざ笑って、

「憐れやな……。ユーノが美人だといったのは、かのご老体だけで。果たして、信用できるんか？」

「俺も、クリンに賛成！ ヴァーチャルのユーノより、リアルのモネちゃんだよ！」と、ポチもクリンに同意した。

「ふん、軽率なお前らがつくづくうらやましいね！」と、シドが反発した。

すると、ずっと黙っていたドクが、突然、わめき出した。「なんだ、ここは？ 携帯が全然かからないぞ！」

「ここは本土から遠くはなれた離島やで。携帯やネットはつながらんよ」とクリン。

「じゃあ、本土との交信はどうやって？」

「固定用の電話回線が海底をとおしてつながっているらしいに。だから、何か起こった時には、きちんと本土に連絡ができるそうや」

クリンの説明に納得して、ドクはおとなしく引き下がった。

あらしはますますひどくなってきた。荒れ狂う海の波しぶきとつむじ風が奏でる轟音が、白雪邸の奥底まで響きわたっていた。

大広間におかれた大きな鳩時計が午後六時を指した。天窓から瑠璃色のカツコウがとび出して、クツクウ、クツクウ……、と不気味な鳴き声を六回発して、時を告げた。宿泊客全員が食堂に集まって、その日の晚餐が催された。

しばらく食事が進んだところで、給仕をしていた二階堂氏が、前に一歩踏み出して発言した。

「みな様に残念なことをお伝えせねばなりません。夕刻に見えるこ

予定のユーノ様ですが……、海が荒れていてどうしてもこちらに来ることができないとのご連絡が、先ほどございました」

「ええっ！ それじゃあ、なんのためにここに来たのか……」と、シドは呆然としていた。

「そうですか。残念やな」と、クリンもがっかりした様子である。

「まあ、いいじゃない？ ユーノが来なくても、ここにはモネちゃんがいることだし」と、ポチは全く動じていなかった。

「わたしもユーノさんには、ぜひお会いしたかったのに」と、ココは残念そうに呟いた。

「そうだよ。ユーノさんがいなきゃ、このオフ会も無意味じゃないか！」

ドクは再び怒りをあらわにしていた。

「ユーノさんは、天候がおだやかになれば、きっと見えるとあたしは思います」

一同を励ますようにモネがそう断言すると、それを聞いた二階堂氏は会釈をして、

「さあさあ、みな様、ごちそうが冷めてしまいますよ」と、おいしそうに並んだ料理を、客たちに勧めた。

食事は、それは申し分のないものであった。気が付くと、全員が無言で、料理に舌つづみを打っていた。

「あれれ、モネさんは左利きなのですね？」

ひとりだけ左手で食事をとっているモネに気づいて、ドクが訊ねた。

「はい、ちいさい時からあたし、ずっと左利きです」と、申しわけなさそうにモネが小声で答えた。そのかわいらしい返事を確認すると、ドクはうれしそうに右手中指を伸ばして、ずり落ちた眼鏡を持ち上げた。

やがて、ポチがポツリと口ずさんだ。

「主催者だけがやって来ないか……。まるで、アガサ・クリステイ

の『そして誰もいなくなった』だな……」

テーブルに腰かけた五人の男女の視線が、いつせいにポチに集中した――。

「そういえば、玄関ホールにある白雪姫と七人のこびとの彫像も、クリステイの小説とよく似ている……」と、ドクも同意した。

「まさか――。悪い冗談やに」

そういいながらも、クリンの肩は小刻みに震えていた。

「でも、わたしたち泊り客は六人でしょ？」と、ココがすまし顔で答えた。それを聞いたクリンは、ほっとしたように、

「つまり、あの彫像の白雪姫が、さしずめユーノ自身であると想定しても、実際にこびとは七人いたのに、ここにいる泊り客は六人しかないから、関係はないということか？」と、胸をなでおろした。「でも、スカルさんって方が、来ていないのですよね？」と、モネが不安そうな表情をすると、

「そうだ！ 来ていないことになっているスカルが、実は邸内に潜んでいて、ぼくたちを監視している――なんて可能性はないだろうか？」と、興奮気味のドクが叫んだ。

すると、ポチがいたずらっぽくまわりを見まわして、「そんなややこしいことを考えずとも、二階堂のじいさんを加えれば、われらはびったり七人になっているぜ――」といった。

ただひとり、シドだけがきょとんとしていた。「その……、仮に泊り客とこびとの人数が同じだったとして、いったいそれがなんの問題になるんだ？」

さっそく、ポチが小ばかにするように、「なんだよ。その年にもなつて『そして誰もいなくなった』を知らないのかい？」と、挑発してきた。

「悪かったな。俺は読書とか、そういった面倒くさいことはきらいなんだ！」

真っ赤になったシドを気づかって、クリンがあわてて、「離れ小島に招待された十人の客が、童謡になぞられてひとりずつ殺されて

いくつて話や……」と、説明した。

さらに、ドクが付け足した。「その時に、客を招待した島の主人が姿を見せなかったんだ。たしか――、オーエン氏とかいったよね」「そうそう、U・N・オーエン（Owen）氏……。裏の意味は、アン・ノウン（unknow）。すなわち、どこの誰とも分からぬ人物――、という意味だったな」と、ポチがうなずいた。

「おい、ひよつとして、ユーノ（Uno）って、いい換えると、アン・ノウンということにならないか……？」

ドクとポチが顔を見合わせた直後のことだった。女のヒステリックな悲鳴が聞こえた。声の方向を見ると、モネがテーブルにうずくまっていた。

モネの隣に腰かけていたクリンが、くたつとなった細身の身体を抱き上げた。「お嬢さん、おちついて。彼らのしとつた今の話は、ほんの冗談ですよ……」

驚いて椅子から立ち上がったものも何人かいたが、すぐにモネが意識を取り戻した。

「すみません――。わたし昔から、ささいなことで気を失うことが多い……」

うつろな瞳で、モネがみなに陳謝した。

「まあ、とにかく、何もなくてよかったわ」と、ココがため息をついた。

「まさか、ユーノさんに限って、そんなことは考えられないね……」
真っ先に椅子に腰をおろしたシドが、うまそうに子羊肉^{ラム}をほお張った。

食堂での晚餐のあと、泊り客たちは広間に場所を移してくつろいでいた。彼らの話題は、もっぱら、ゲームでの思い出や、ユーノの人物像などであったが、やがて、それぞれの身の上ばなしへと進展していった。

ポチがドクの顔をのぞき込んだ。「へー、デブのにいちゃんは、

「お医者さんなんだ」

「ゲームのお名前、そのままですね」とココ。

「はい。たいして考えずに、そのままつけてしまいました。義理の父がクリニックを開業していて、半人前ですがそちらでどうにか働かせてもらっています」と、顔を赤らめたドクが答えた。

皮肉っぽい口調で、クリンがいった。「将来は院長さんか。半人前といっても医者には医者。収入は俺たちとは比べものにならないのだからね」

「ココさんは学校の先生だと、うかがいましたが」

シドが話題を振ると、

「はい、私立タカバタ高校で数学を教えています」

その時、ココは右手に鉛筆、左手に八十一マスの数字パズルの本を持っていた。

「高畠——！ 三重ナンバーワンの進学校じゃないの。そんな所に通う先生が、夜中にオンラインゲームに興じているとは、ちょっと不似合だね」

ポチが茶茶を入れると、

「誰だつて息抜きは必要です」と、ココはさりげなくかわした。

ポチも負けていない。「かくいう俺も、これで東洋学園出身なんだけど……。名古屋の私立高で、まあいうなれば、高畠とはライバル関係だよ——」

クリンがドクに視線を振って、「じゃあ、ドクさんもお医者さんなのやから、さぞかし有名な高校の出身でしょうな」と、皮肉ると、「ぼくは、普通の県立高卒です。残念ながら……」と、ドクは悔しそうにうつむいた。

モネが興味深げに、「シドさん——のお仕事は？」と、訊いてきた。

「警備員です」

「あはっ。まさに体格そのままやね」と、クリンが横やりをいれた。「考えることは苦手なので——」と、シドが弁解すると、

「俺も、努力することがむかしから苦手なんだよなあ」とポチ。

こんどはドクが質問した。「クリンさんのご職業は？」

「フリーターってやつですかね。まあ、その日暮らしのプー太郎ってやつだな」

笑いながらクリンが答えると、またもやポチが、「銭がかせげないのなら、オンラインゲームなんかしている暇はないんじゃないの？」と、生意気な台詞を吐いた。

「コンピュータは上手に使える、時には利益を生み出すものに」

「パチンコよりも、ネット株をしたほうが儲かるのか？」

「まあ、そんな所やね」とクリン。

「ネットといえば、ネットアイドルのモネさんは、かなり稼いでいるそうだなあ」と、ドクがモネに横目を向けると、

「いいえ、収入なんてほとんどありませんよ。でも、こうしているうちにすこしでも有名になれるのなら、と思つて一生懸命頑張っています」

口元で軽くこぶしを握りしめながら、モネがほほえんだ。

しばらくすると、左手にはめた高級腕時計を見つめて、ドクが「ちよつと、トイレに行つてきます」とひとこと告げて、立ち去った。ドクが出ていくと、ポチがほくそ笑んだ。「わざわざ、トイレにいつてきます、だってさ。あいつ、かなりのお坊ちゃまだな——」すると、こんどはクリンが「では、わたしも部屋に戻るとしますか——」といって、部屋から出ていった。時刻は午後八時をすこしだけまわった頃であつたが、そのあと、いくら待つていてもドクは戻つては来なかつた。それからしばらくして、二階堂老人が、厨房からエレベーターに向かつて、廊下を歩いていくのが見えた。大広間の扉は、常にあけっ放しだ。視力に自信のあるシドは、老人が運ぶトレイに、ウイスキーグラスとアイスボックスがのせられているのを、しっかりと確認した。

その後も、広間では、シド、ポチ、モネ、ココの四人の会話が弾んでいた。まずポチがオンラインゲーム『永遠の剣』の中でのエピソードを切り出した。

「キマイラ洞窟にみんなで行ったこと覚えているかい？」

ココがあきれたそぶりをしながら、「あの時は大変だったわね。みんな自分勝手だったし……」と答えた。

「ええと、誰がいたかな？ 魔法戦士のココ姉ねえと、白魔術師のユーノ、黒魔術師のドクに……、そうそう、ばか強い戦士のシド……。そういえば、シドのキャラって、リアルとそのままじゃなか。ははは……」

そういつて、ポチは腹を抱えて笑いだした。

「悪かったな。どうせ不器用だよ。俺は——」

「いやいや、ごめんよ……。本音をいうと、すごく頼りにしているよ。あんたの強さは半端じゃないからね」

「ポチ君は吟遊詩人だったわね。あの洞窟でも、モンスターを錯乱させたりして、とっても要領よかったわよ」

ダイエツトコーラを口にしながらココが、ポチをほめた。

「俺は肉体労働よりも頭脳労働のほうが得意なんで……。そういえば同じ戦士でも、モネちゃんはいつでもすぐに死んじやっていたね？」と、ポチは申し訳なさそうに、くすくすと笑った。

すると、モネはうれしそうな顔で「はい、そのたびにユーノさんに生き返らせてもらっていました。たしか、あの時は四回も死にましたよね……。でも、とても楽しかったです。あたしひとりでは、あんな奥深くまで行くことはとてもできませんもの。ずっとわくわくでした」と答えた。

「ユーノは白魔術で死人を生き返らせることができるからな」

「本当にユーノさんっていつも親切なんですよ。今回の旅行もユーノさんが直々に誘ってくださったんです」

「へー。ゲームの中で？」

「はい。ユーノさんは、『オフ会を予定しているんだけど、もし開

催することができたら、モネさん、参加してくれる?」って……。
あたし即答でOKしちゃいました」そういうと、モネはあどけなく
笑った。

「まあ、ユーノが親切なのは、モネちゃんに限ったことではないけど
ね」と、ポチも認めた。

「こんどはココが、「あの時は、ほかに誰がいたかしらね?」と、
首をかしげた。

「あとは……、スカルだ。ほら、トレジャーハンターの……」思い
出したようにシドが答えた。

それを聞いて、ポチが愚痴った。「ああ、そうそう……。何も戦
わないスカル様……。あいつがいないと、宝箱の罠が解除できない
からな。仲間に悟られずに、スカルだけが宝箱の中身を、真っ先に
確認できるんだ。お宝はあとで公平に山分けするっていつているけ
ど、きつといい品物だけを、こっそりとくすねているんだぜ。あい
つは! ユーノも甘いよな……。やつこさんの不正を知りながら、
見逃してやっているのだから」

「そこがユーノさんのよ……」と、感心するようにココがいうと、
「たしかに、俺もスカルってやるうは、あまり好きじゃなかったな
と、シドがポチに賛同した。

モネが一同を見まわした。「あのお、さきほど見えたクリンさん
って、ゲームの中ではどんな方ですか?」

「なんだ、モネちゃん。クリンに会ったことなかったのか?」

「ええ。あたし、はじめてから間がないので……」

「そうだったね。クリンは鍛冶屋さ。武器とか、防具とか、そのほ
かいろいろなすぐれたアイテムを作り出すことができる職業だよ。
俺たちもクリンにはいつも世話になっている」

「どんなふうですか?」

「ええとね。武器とか防具って、使っているうちにだんだんぼろく
なっていくだろ。腕のいい鍛冶屋は、ぼろくなったアイテムの修繕
ができるんだ。例えば、切れ味が悪くなった剣をクリンに渡せば、

それを新品同様にしてくれる。俺たちはそのお礼に、修繕の代金を払うのさ」

「あの、ゲームの持ち物って、どうやってたら相手に手渡せるのですか？」と、モネがきょとんとしながら訊ねてきたので、

「そっか、それも知らないんだね。アイテムを渡したい相手のプロフィール画面を選択すると、中に握手をしている図柄のアイコンが表示される。それをクリックすれば、トレーディング・モードの画面が開かれる。そうすると、お互いの持ち物を交換しあうことができるようになるんだ」

「そうなんですか？　ちつとも知らなかったです」と、モネは大真面目だった。

「モネちゃんは欲がないね」と、ポチはあきれていた。「鍛冶屋は冒険には不向きだから、キマイラ洞窟探検の時には、たしかクリンはいなかったよ」

「じゃあ、クリンさんは、冒険が全くできないのですか？　それだと、ゲームがあまり面白くないのではありませんか？」

「まあ、その人なりの楽しみがあるんだよ。クリンの場合は、人に奉仕しながらゴールドを稼いでいくのが楽しみなのさ」と、シドが説明すると、ポチがにやりと笑った。

「実際、あいつは貯め込んだゴールドを使って、ゲームの中で土地を転がして、俺たちが想像を絶するほどの大金を稼ぎまくっているんだぜ」

「ゲームのお金なんかいくら貯めたって、なんの役にも立たないじゃない？」と、ココが聞き返すと、

「ココ姉、知らないの？　今やゲームマネーがネットオークションで売買される時代だよ。リアルマネーを払ってまで、ゲームでのゴールドを欲しがる買い手がいるってことさ」と、ポチがいった。

ココは眼をまるくしながら、あきれかえっていた。「ゲームという仮想世界の中で、ミクロ経済が進展するということなのね」

「そういうこと。案外、フリーターのクリンはこの方法で莫大な生

活費を稼いでいるのかもね」

「まさか……？」と、思わずシドが真面目顔でのり出してきた。

やがてモネが、「厨房にいつてきます」と、ひとこと告げて部屋を出ていった。しばらくすると、軽やかな足取りで、モネが大広間の前の廊下を、こんどはエレベーター方向にとおり過ぎていった。

数分後に二階堂氏が顔をのぞかせ、「モネ様は？」と心配そうに訊ねた。

「さつき、ここから出ていってから、そのまま戻ってこないわよ」と、ココがいうと、

「さようでございませう……」と、老人は小首をかしげて、エレベーターの方へ歩いていった。

シドは提供された上質ワインの酔いがまわってきて、この頃からしだいに細部の記憶があいまいになっていった。

あとでわかったことだが、広間に残った三人のうちで、ワインを飲んでいたのはシドだけで、ほかのふたりはノンアルコール飲料をたしなんでいたとのことであった。

やがて、ココが給仕の呼び鈴を鳴らした。「ちよっとー、二階堂さん」

一分ほどしてから、二階堂氏が姿を現した。「お呼びでございませう。ココ様」

「眠くなってきたから、そろそろ自室に戻るわ——。それから、きのうのあたたかいミルクココアを持ってきてね」

「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

ココは席を立ち、いなくなった。しばらくして、二階堂氏が大きなマグカップをのせたトレイを持って廊下を歩いていったのを、シドはかろうじて覚えていた……。

ココが去ってどのくらいたったであろうか？

気がつくとシドは、ソファアの上で寝ころんでいた。ポチの姿は、いつの間にか広間から消えていた。

不意をついて、あの不気味な鳩時計のふいご音が響きわたった。
——クックウ、クックウ、クックウ、……
驚いたシドが時刻を確認すると、針は十一時を指していた。

4・密室の中の変死体

その時、広間の出入り口には二階堂老人が立っていて、こちらをじつと見つめていた――。

シドはぎくりとして、ソファーから起き上がった。まだ頭がくらくらするが、どうやら意識ははっきりしているようだ。

「お休みの所、申し訳ございません。実は――」と、二階堂氏が切り出した。「晩餐のあとで、ドク様とクリン様のおふたりが、書斎でお話し合いをされたいと仰せになり、わたしは二階の書斎にご案内いたしました。ところが、この時刻になっても書斎から出て見えないようなので、心配をいたしまして、扉をあけようとした所、内側から錠がおろされていまして……」

「書斎には、鍵がかけられるのですか？」と、シドは聞き返した。

「そのお――、一般の部屋にはチェーンロックしか設置されていませんよね。チェーンロックだけなら、はいることはできなくても、扉をひらいた隙間から、中をのぞくくらいならできるでしょう？」

「はい、書斎と白雪の間のふた部屋だけは特別で、チェーンロックの代わりに、内側からかけられる頑丈な差し込みボルト錠が設置されております。どうやら、そのボルトがおろされてしまったようなのです」

「すると、中の様子は何も確認できないとでも？」

「さようでございます。扉は固く閉ざされていて、全く動きません」

シドは老人について書斎に行くことにした。

途中でシドは、ポチが泊まっている火炎の間の前で立ち止まると、扉をどんと叩いた。

「おい、チビすけ。用事だ、起きろ！」

呼んでからしばらくすると、ゆっくりと扉が半開きになった。

「何……。今、何時……？」

チェーンロック越しに、寝ぼけまなこのポチの顔が見えた。

「とにかく、早く出てこい！」

シドが命令すると、ポチはすぐすごと廊下に出てきた。

「ドク様とクリン様のおふたりが、お部屋に戻られていないようなのです」と、二階堂氏が申し訳なさそうに頭を下げた。

「それで、ふたりがいそうな場所は？」

「ふたりは書斎にはいったまま出てこないらしい。しかも、中から差し込みボルト錠がかけられているそうだ！」

「ふーん、そいつは奇妙だな……。ほかの泊り客は？」

ポチとシドがそろって老人の顔をのぞき込んだが、老人は何も語らなかった。

ようやく三人はエレベーターの前までやってきた。シドは、白雪邸のエレベーターにのるのはこれが最初だった。三人がのり込んで、二階堂氏がボタンを押すと、エレベーターの扉がゆっくりと閉まった。やがて、独特な重力が加わって、エレベーターは二階に到着した。すると、扉があいた瞬間に、ポーン——、という効果音が鳴り響いた。

二階の廊下にも、いくつかの扉が立ち並んでいた。いちばん手前の扉の表札には、白雪の間、と文字が書かれている。その次の表札が、森林の間となっていた。

「たしか、黄金の間にはモネさんが、そして大地の間にはココさんがいるはずですよね？」と、シドが確認を求めたが、老人は戸惑うしぐさを見せた。

横からポチが、しびれを切らして、「こんな遅くに、わざわざ起こす必要もないだろう……」と、老人の代弁をした。

「それもそうだな。じゃあ、急ごう——」と、シドがいった。

三人は二階の廊下を西向きに歩いていた。エレベーターの出口から、白雪の間、森林の間、黄金の間、大地の間と順番に扉の前を通り過ぎて、ついに書斎までやってきた。シドとポチは、互いに眼で合図をすると、シドが書斎の扉のノブに右手をかけた。ノブはすんな

りと半回転ほどまわせたが、押してみても何かがひつかかって、扉は微動だにしなかった。こんどはポチがあげようと試みたが、やはり結果は同じであった。

「たしかに、ボルト錠がおりている！　おい、ドクさん——、クリンさん——。いるのなら、あけてくださいーい……」

シドが扉をどんと叩いたが、全く反応はなかった。

「こうなったら、扉を壊すしかない！　よろしいですか、二階堂さん？」というやいなや、シドは扉に体当たりをぶちかました。しかし、頑丈なオーク材でできた扉は、この一撃程度ではびくともしなかった。

「こいつはやっかいだな」シドが肩をぐるぐるとまわした。「おい、お前も手伝え！」

シドの強引な命令に、ポチはしぶしぶ承諾した。シドとポチがスクラムを組んで扉にぶつかった。二階堂老人も手伝いたいのか、いつしよになって体当たりを試みた。ところが、年をとっているためか、どうしてもタイミングが若い二人からワテンポずつ遅れてしまう。結局、シドとポチがぶつかったあとで、二階堂氏がふたりに体当たりするという動作が、数回繰り返された。

シドの体力は眼を見張るものがあつた。あれだけ頑丈な扉も、しだいにメシメシと軋みだした。

「じいさん——。あんた、もういいよ」と、ポチが叫んだ。扉に体当たりするだけでも身体じゅうが悲鳴をあげているのに、そのあとでさらに老人がぶつかってくるのだからたまらない。

「いえいえ、わたくしめも微力ながら、お手伝いさせていただきます」

必死になっている二階堂氏は、聞く耳持たずであつた。あきらめてポチは体当たり専念することにした。

「もうすぐだ、がんばれ！」と、シドが声を荒げた。

七回目の試みで、頑丈な扉がついに破壊された。勢い余って、シドとポチは室内につんのめつた。シドがまず先に倒れこみ、ポチは

かろうじて踏ん張ったのだが、あとからタイミングがずれてぶつかってきた二階堂氏の体当たりにあっけなく押されて、ポチと二階堂氏はもつれ合ったまま、うつぶせのシドの上に重なるように倒れ込んだ。

「痛ててて……」

暗闇で一番下敷きになってしまったシドが、うめき声をあげている。

「これは申し訳ございません。すぐに灯りをつけますから」

ふたりの上にのっかっていた二階堂氏がやつのことで起き上がると、壊れた扉の横壁にあるスイッチを手探りで探し当て、右手人差し指でスイッチを押した。ようやく、書斎の中が明るく照らされた。

ほぼ同時に三人は息をのむこととなった！ 広い書斎の正面奥には、暖炉があつた。大理石でつくられたマントルピースの両サイドの土台は、こちらに向かって大きくせり出していた。そのせり出した大理石を枕にして、青年医師ドクが仰向けになって倒れていた。二重あごの口をポカンと大きくあけ、両眼は眼鏡越しに天井を睨みつけていた。頭部から流れ出たひと筋の血が、白い大理石に茶色くこびり付いていた。

ポチが倒れているドクに近づこうとしたので、シドがあわてて大声をあげた。

「おい、チビ——。勝手に動くな！」

ポチは、ビクツと肩を震わせて一旦は立ち止まったが、やがて、ドクを指差すと「このままじゃ埒があかないだろう？ こいつは事件なんだ。おそらく、この先生はもう仏さんになっちまっているぜ」と、説き伏せるようにいった。

「扉には内側から差し込みボルト錠がかけられていたんだ。だから、これからの行動は極めて慎重に行う必要がある！」と、シドは全く譲らない。

それを見ていた二階堂氏が、「シド様のおっしゃりたいのは、三人が勝手に行動すると事件の重要な手がかりをうっかり隠滅させてしまう懸念があるということですね。どうでしょう？　これからの調査では、誰かひとりか物を調べて、他のふたりがその人を監視するようにしたらいかがでしょうか？」と提案した。ポチとシドは即座にこれに同意した。

書斎は一階の大広間と同じく、ひときわ広い部屋だった。何事も見透かすまいと、シドは周囲に全神経をそそいだ。

上に視線を向ければ、天井は異常な高さで、そこには豪華なシャンデリアがポツンと灯っていた。天井の一角には空調設備の通気口が開いていたが、そこには金網ががっしりとはめ込んであった。

室内には様々な調度品が置かれていた。部屋一番奥には、こげ茶のマホガニー材でつくられたクラシックな書き物机があった。暖炉のマントルピースの上には、ひとりの美しい少女の色あせた肖像写真が飾られている。中央には談話をするためのテーブルがあり、ソファアがふたつテーブルを囲んで向かい合っていた。それぞれのソファアの前にグラスがひとつずつ置かれ、それからふたがあけられた高級ウイスキーのボトルと、金属製の氷入れと氷挟みがのっていた。断熱効果のある氷入れの中には、透きとおった氷の大きな固まりがいくらか残っていた。グラスのひとつは横に倒されて、琥珀色の液体がこぼれて散乱していた。もうひとつのグラスはきちんと立ったままで、琥珀色の中身はそのまま残っていたのだが、氷はほとんど溶けてしまっていて、わずかにかけらが浮かんでいた。さらに、テーブルの上には奇妙な形をしたうす緑色の陶器が置いてあり、中から細いひとすじの煙が出ていた。

「香を炊いているのか……。どおりでさっきから香のかおりが、部屋中に漂っているんだ。それにしても、書斎に香とはね……。」と、シドはひとことばやくと、倒れているドクに眼を向けた。しかしこの時、ポチがシドの肩をつかんだ。

「まず、俺が確認するよ。あんたは見ていてくれ」

そういつとポチはドクの傍にひざまずいた。ドクの首筋にそつと右手をかざして脈を調べたあとで、口元に耳を近づけて呼吸を調べたが、

「間違いなく彼は死んでいる。少なくとも死後一時間は経過しているようだが、それ以上詳しくはわからない。俺は専門家ではないんでね……」といった。

続いてシドもドクの遺体を調べたが、結局、ポチの判断に同意した。

「あんたも、確認するかい？」

ポチは老人に眼を向けたが、老人は立ちすくんだまま拒むように手を振った。

「二階堂さん、この建物に外部からの人間が侵入することができませんか？」と、シドが老人に訊ねると、

「いいえ。さきほど申し上げましたように、午後八時になると、玄関はオートロックがかかりますから、外にいる人が邸内にはいることはできません」

「もつとも、ここは離れ小島だぜ。建物のそとにだって俺たち以外の人間なんていないと思うよ」と、ポチが嫌味を付け加えた。

次に三人は壊された扉に近づいた。やはり、ポチがシドを押しつけて、最初に倒れている扉に手をかけた。アンティークな丸い形状をした真鍮のドアノブには、鍵穴はついていなかった。そのかわり、ドアノブの下には極太のスライド式の差し込みボルトが設置されていた。ボルトは差し込まれた状態で扉にくっついたまま残っていたが、ボルトを受け止めていた壁のくぼみは、頑強な男たちの体当たりによって、見るも無残に破壊されていた。破壊されたボルトの受け口から斜め上方の壁に、電灯のスイッチがあり、その真横にはインターホンの受話器が吊り下がっていた。さらに壁は、その先で隅につきあたって、東側の壁へとつながっていた。そして、人の背丈よりも高いスチール製の書架が、東側の壁をほぼ全面おおっていた。書架と扉との間隔はそれなりに十分あるので、たとえ本を探してい

る人がいる時に書斎に誰かがはいってきても、扉をぶつけて怪我を負わせてしまうという心配はなかった。

シドが壁を指差して訊ねた。「あのインターホンは、どこにつながっていますか？」

「厨房につながっております」

「ほかには？」

「いえ。ほかはどことも……」

「そうか。インターホンをつかえば、書斎から厨房へと連絡ができるのか——。二階堂さん、これまでに書斎と何か通話をされませんでしたか？」

「ええと、最初はウイスキーグラスと氷を用意するように、そのあとしばらくして、氷が融けてしまったから補充してほしい、といわれしました」

「ぜんぶで二回ですね。——誰から？」

「いずれもドク様だったように思います……」

シドが念を押した。「二階堂さん、そこはとても重要なことです。本当にドクさんでしたか？」

「間違いございません。ドク様でした！」と、こんどは、老人は、はつきりと断言した。

「それで、二階堂さんが書斎にグラスを運んだ時には、ふたりもいたのですね？」

「はい」

「時刻は？」

「たしか、八時一五分です」

「その時の、ふたりの様子は？」

「クリン様とドク様が、テーブルを囲んでソファに腰かけているのが見えました」

シドはすぐにふたりの腰かけていた位置関係を老人に確認した。老人の証言によると、テーブルの南側——つまり窓に近い方にドクが座り、北側——すなわち扉に近い方にクリンが座っていたという

ことであつた。倒れられていたグラスは、クリンの側に置かれたグラスであつた。

「それでは、二回目にドクさんが連絡してきたのは、いつでしたか？」

「そうですね……。前の電話から一時間ほど経っていたので、九時十分くらいでございましょうか」

「その時も、あなたがインターホンを受けたのですね」

「そのとおりでございます」

すると、ポチが興味深げに、「でも追加の氷は、たしかモネちゃんが行ったよね？」

「はい。あの時はドク様が、もしモネ様が近くにいるようだったら、彼女に運んできてもらいたい、と仰せになりました……」

「ふーん、モネちゃんをじきじきにご指名ね……？」と、ポチはすこし考え込んでいたが、やがて壊れた扉に眼を向けると、「さてさて、書斎の外部にいる人間が、何らかの手段で、この差し込みバルト錠をおろすことが、物理的に可能だと思うかい？」と、シドに訊ねた。

「無理だね……」と、シドはあつさり首を横に振った。

「じいさん、扉に妙な細工は施されていないよな？」と、ポチが確認すると、

「はい、いったん閉めてしまえば、扉と壁とのあいだには隙間は全くありません。細い紐などを無理やりとおしても、ボルトの重量が重くて、スライドさせることはおよそできませんし、そもそも紐自体が挟まってしまつて動かないことでしょう」

「ということは、扉からの出入りは不可能だな！ だとすると、窓か……？」

「窓から外部のものが出入りすることも不可能だと思います。なぜなら、白雪邸にはベランダがないので、適当な足場がありません。窓ガラスはとても大きくて、つかまることすらできないでしょう。それに、一応ここは二階ということになっていますが、通常の建物

の四階に匹敵する高さです——」

二階堂氏の返答はとても簡潔で的確であつた。

ちようどその時、エレベーターが二階に到着した合図のポーンという音がした。ほどなく、メイド姿のモネが両手に大きな皿を持って現れた。

「あのお、みなさん、どうかなされましたの？」

あどけない声で、モネが訊ねた。

「モネ様、どうかその場にいてください。中には、はいらないように！」と、二階堂氏がいつになく強い語調で命じた。モネは驚いて、書斎の入口から廊下へとあとずさりした。

シドがモネに近づいていった。

「モネさん——。あなた、自分のお部屋にいらしたのではなかったのですか？」

上目づかいにじつとシドを見つめて、モネが静かに答えた。「いえ、ずっと厨房にいました。でも、変な物音が数回したので、心配になって上がってきました」

「この頑丈な扉をぶつ壊したのだから、さぞ、やかましかっただろうね」とシド。

「いいえ、それほどは……」モネはポカンとしていた。

すると、二階堂氏が、「ああ……。白雪邸の一階と二階の間の床には防音材が仕込まれておりまして——、下にいる方には、二階の音がよく聞こえなかったのかもしれませんが」と、説明した。

不意をついて、ポチが「ところで、じいさん——。あんだ、モネちゃんが厨房にいたことを、さっきからずっと知っていたんだよね？」と、老人をなじった。

「申し訳ありません……。はじめは書斎のおふたりに林檎をお持ちしようと、わたくしが準備をはじめましたが、ちようどその時、モネ様が厨房にいらしたので、彼女に林檎の皮むきをお願いいたしました。そのあとで、わたくしは書斎にまいりました。しかし、書斎

には鍵がかかっておりまして、お呼びしても中から返事もございません。心配になり、シド様に相談持ちかけたしだいでございまして……」

そういうと、二階堂氏は深々と頭を下げた。

「モネさんに心配かけたくなかったというわけか……」と、シドが老人を弁護した。

モネはこのやり取りを黙って見ていたが、やがて思い出したように、手にしている皿を差し出した。「みなさん、折角ですから、お林檎いかがですか？」

どの林檎も丁寧に皮がむかれて、食べやすい大きさに切ってあった。大皿にめいっぱい盛られているので、かなり多くの林檎がむかれたようであった。

「ひとつ、いただきますよ——」

こんな状況にもかかわらず、ポチはずうずうしく一切れの林檎をつまんだ。

「みなさんいかがですか？」

モネはにこにこ笑っているが、さすがにシドと二階堂氏は遠慮するしぐさを見せた。

「本当に白くてみずみずしい林檎だね。でも夏なのに林檎があるなんて、不思議だなあ……」

ポチは夢中で、ふた切れ目の林檎をつまんで、むしゃむしゃとお張っている。

「最近では林檎も貯蔵技術が進歩しまして、一年中取り立てのように新鮮な林檎が楽しめます。お値段は少々お高いのですが、林檎は白雪姫のシンボルでもありますし、ユーノ様のご指示でお取り寄せいたしました」

二階堂氏がうれしそうに説明した。

「ところで、モネちゃんはいつから台所にいたの？」

さりげなくポチが訊ねたが、シドがそこにわってはいった。

「おいおい。モネさんのことを疑っているのか？」

しかし、モネは何ら悪びれた様子もなく、舌を出して、「はい、二十分ほど前からだと思います。あたしぶきつちよで、林檎の皮をむくだけでとっても時間がかかってしまいますの……」といった。「へえ、二十分ねえ。たしかにこれだけむくとなると、そのくらいの時間経っていてもおかしくないか——。だけど、どの林檎も全くな変色していないね。林檎なんてものは、切ってからある程度時間が経過すると、茶色に変色してしまうものだけど……」と、ポチが意地悪そうに質問した。

「二階堂さんからいただいた魔法のお水がありまして、皮をむいた林檎はすぐにその水にひたすんです」

「アスコルビン酸ナトリウムの溶液でございます。林檎の酸化防止に効果があります」と、二階堂氏が補足した。

「モネさん、ここに来るまでに、クリンさんやココさんに出会いませんでしたか？」と、こんどはシドが訊ねた。

「いいえ、誰とも……」

シドはモネにすこしずつ近づいていった。やがて、彼女の前にたどり着くと、恥ずかしそうに眼を伏せながら、「あのお、ところでモネさん——。いいにくいことですが、お洋服の、その……、襟元が少々はだけているのが、さっきから気になっていまして……」と指摘した。

モネのブラウスの襟元から胸元にいたるまでの三つのボタンが全部はずれていた。きめの細かい色白の地肌と、かわいらしい形をした鎖骨が、もろに露出していた。

「あら、まあ！」

モネはひどく驚いた様子だった。胸元を手でおおって、あわててボタンをはめると、頬を林檎のように赤らめた。

「ひよっとして、お気づきではなかったのですか？」

「はい、全然……。もう大丈夫です。いつのまにこんなことに？」

ようやく落ち着きを取り戻したモネを見て、シドはにっこりと笑った。

すると突然、ポチが「とにかく、窓から順番に調べてみようぜ。おーい、マツチヨのあんちゃん。あんたとじいさんで見えてくれ」と、シドに指図をしてきた。

お前がやればいいじゃないか、といい返したくなる気持ちをぐっところえて、シドはゆっくりと窓に近づいた。二階堂氏もいっしょについていく。

モネが心配そうに部屋の中をのぞき込んで、「みなさん、いったいどうされたのですか？」と訊ねた。しかしそのあとで、倒れているドクを発見すると、モネはへなへなとその場に座り込んでしまった。手にしていた皿の林檎は、絨毯の上にぶちまけられた。

「ほらほら、いわんこっちゃない！ モネちゃん——、おい、大丈夫か？」

ポチがあわててモネに近づくと、すぐにモネは意識を取り戻した。「ごめんなさい。今の——、ドクさん？ いったい何が……？」

ポチが事のしだいを説明すると、ちょうどシドと二階堂氏が戻ってきた。

「この部屋には三つ窓があったけど、全てが内側から三日月型鍵がかかっていたよ。さらに三日月型鍵を固定するためにスライドさせる金具もついていたけど、それも閉まっていた。つまり、どの窓も、完璧に二重ロックがされていたということだ。それに、さつき二階堂さんがいったように、窓をつたってこの部屋にはいることなど、とてもできないよ！」

「この部屋にほかに秘密の出入り口なんてものはないよね？ 天井や床から出入りできるとか……」と、念をいれてポチが確認を取ると、「ございません」と、二階堂氏がきっぱりと断言した。

「ということは……、この部屋は完全な密室だということだ！」

丸太のような太い腕を組んで、シドは力強く主張した。

「それでは、どのように犯行が行われたのでしょうか？」と、モネが問いかけると、ポチが、

「ひよっとしたら、犯行なんてなかったのかもしれない。ドクは酒

に酔っぱらって、勝手にボルト錠をおろしたあとで、足を滑らせて大理石に後頭部をぶつけたただけかもしれないね。とにかく、もう一度仏さんを調べてみよう」と、独自の見解を述べた。

シドとポチのふたりが手分けして、ドクの遺体を調べた。

「後頭部のほかには、特に外傷はなさそうだな――。もつとも、こいつを裸にしてみなきゃ、断言はできないが……」

「毒殺の可能性は？」とモネ。

「何か薬を飲まされていることもありうるけども、今ここでは確認できないな」と、ポチがいった。

二階堂氏が、「ドク様の持ち物を並べてみました」と、トレイの上に並べた遺留品を見せた。

遺留品は全てドクの衣類のポケットから見つかったものだ。大きな蛇皮の財布の中身は、一万円札が六枚と現金が少々、それに四種類のクレジットカードがはいっていた。そのほかには、くしゃくしゃに丸められたタオルハンカチ、携帯電話と運転免許証に名刺入れ、『太陽』と刻まれた金庫の鍵などがあつた。

「本名は松村孝裕――まつむらたかひろ。生年月日から、年齢は三十二歳だとわかる

……。住所は神奈川県こまねの宮前区だ。松村内科クリニックか。医者というのは本当だったんだな。おや？ 免許証の名前は河本孝裕こまもとになっている！ 交付は四年前か……。どうやら婿さんってことだな、やつこさんは――」と、ポチが推論した。

「このメモリースティックは？」

モネが指差すと、ポチの眼が光った。「ちよつと、失礼――」

ポチはメモリースティックを手にとると、書き物机に近づいていた。机の上にはノートブックのパソコンが置いてある。

「マッキントッシュか……」

林檎のロゴマークのふたを開いて、ポチは電源を入れた。スティックを差し込んでホルダーを表示すると、中にはたったひとつだけファイルがはいっていた。ファイル名は『Secret of Skully』となっていた。ファイルをクリックすると、表形式のデ

「タが画面に現れた。

ポチが叫んだ。「なんだ、これは……？ 人の名前と性別、年齢、連絡先に、特定の日にちとコメントが書かれている。それにしても膨大な数のデータだな。急性胃腸炎——？ 処方薬、クラビットとラックビー……とね。これって診療患者のデータじゃないの？」

「ドクは医者だから、カルテの個人情報を持っていて不思議じゃないだろう？」と、シドが口をはさんだ。

「それにしても、中には、公開されると患者が困りそうな症状もはいつているぜ……」と、ポチはうれしそうにいった。

シドは書斎の奥の壁を指差して、「ところで、二階堂さん。今、気づいたのですが、あれはなんですか？」と訊ねた。シドの視線の先には小さな扉があった。

「ああ、あれは暗室への扉です。その壁の向こうは、写した写真を現像するための暗室があります」

「その暗室から部屋の外部に脱出することは……？」

「それはできません。暗室にはその扉のほかに出入り口はございませんから」

シドとポチはお互いに顔をみ合わせた。

「あけて見てもいいですか？」と、シドが訊ねた。

「どうぞ、おかまいなく——」

シドとポチはいっしょに暗室へ通じる扉に近づくと、シドがノブに手をかけた。扉はあっさりとあいた。シドが中をのぞき込む。しかし、すぐにシドの顔色が急変した。

「大変だ！ クリンが——ここに倒れているぞ！」

5・残された手がかり

シドはクリンの両脇を抱えて、軽々と暗室から引きずり出した。担ぎ出されたクリンは、気は失っているものの、命に別状はなさそうであった。

それを見ていたモネが、ショックのあまりしゃがみ込んで、がたがたと震えだした。二階堂氏が寄り添って、モネを落ち着かせようとしていた。シドはモネの様子が気になったものの、まずは倒れているスキンヘッド男の状況を確認することを優先した。クリンの心臓は動いていた。

「大丈夫だよ、モネさん——。こいつは意識を失っているだけだ……」

すこしでも安心させてやろうと。シドはそういつたつもりであったが、モネは両手で顔をおおって、相変わらず震えている。するとその時、ポチが暗室の中から、のこのこと出てきた。

しまった、ごたごたの最中で、こいつのことをすっかり忘れていた！——とシドはあとで後悔した。

「おい、何をしていたんだ！」と、シドがポチを問い詰めると、
「あつ……、うん。ええと、暗室に脱出口がないかどうかを、調べていたんだ。結局、何もなかったよ……」

ポチは右手で頭のうしろを掻きながら、悪びれた様子もなさそうであった。

シドは倒れているクリンに眼を向けて、「おい、起きろよ。大丈夫か？」と、頬に張り手を数発かました。やがて、クリンは眼をあけたが、瞳はうつろに天井をさまよっていた。

ついにクリンが口を開いた。「ここは……、どこや？」

「白雪邸の書斎だよ」と、抱きかかえているシドが答えた。

「書斎——、そうだ。あの野郎！」

そういつて、クリンは立ち上がろうとしたが、そのままよろけて

しまった。

「おい、無理はするな」

「畜生――。頭が……、くらくらする。何か薬を飲まれたんや！」

「薬を……？ 誰に？」

「決まってるあ。あのやぶ医者によ！」と、クリンが突っ放す。

「へー、ドクがね……。どうやって？」

「あいつが勧めたハイボールを飲んだら、急に身体がしびれてひどいめまいが襲ってきたんや。あいつのにやけた顔を前にして、俺は意識を失った……」

「その時刻を覚えているか？」

「何？ うん、たぶん……。そうだ、グラスを持ってきた二階堂のじいさんが部屋から出ていってから十五分も経っていなかったと思う」

シドは老人の方を向いた。「二階堂さん、あなた、いつ頃にグラスを運ばれましたか？」

「はい。ええと、八時十五分くらいだったと思います」

「そうだよ。たしかに、それくらいに広間の前を歩いていったね――」と、ポチが同意した。「ところで、クリンのにいちゃんよ。あなた、何か盗られたものはないかい？」

一瞬、クリンははつとして上着のポケットを探るそぶりを見せたが、「いや、何も……」と、小声で答えた。そして、よろよろと立ち上がると、語調を強くして「ええい、けったくそ悪い！ あのやぶ医者は、今、どこにいるんや？」と叫んだ。

「そこに、寝転んでいるよ」と、シドが遺体を指差した。

「何……？」

ようやく、クリンはドクの死体に気づいた。意気込んでいた顔は、急に怖気づいて、みるみる蒼ざめていった。

「俺じゃない！ 何も覚えとらんし……」と、クリンは駄々をこねる子供のようになぐさずいた。それをあやすように、シドが付け加えた。

「クリンさん。あんたには都合が悪い事実だが、この部屋は内側から鍵がかけられていて、密室になっていた。そして、室内には、遺体と化したこのお医者さんと、気を失ったとみずから証言しているあんたの、ふたりしかいなかった——」

「まさか、俺を疑っているんか？　俺があいつを殺しても、一文の得もならんやんか！」

「それに、あんたはしびれ薬をそのテーブルで飲まされたと証言しながら、実際には暗室で倒れていた……。矛盾してますよね。どういうことですか？」

そういつて、シドはクリンの顔をのぞき込んだ。

「全く、わからない……。だいたい、俺が意識を失った場所は、このソファアーだったんや！」と、クリンは頭を抱え込んだ。

「ソファアーで倒れたはずなのに、実際には暗室に……？」

うしろで黙って聞いていたポチが、興味深そうに身体をのり出した。主導権を支配していたシドは、それを見て眉を動かした。シドはあわてて、ポチが何かいいだす前に、相手を変えて質問をすることにした。

「二階堂さん。あなた、まさか運んだグラスに何か細工をなされましたか？」

「滅相もございません！」と、真つ青になって二階堂氏が否定した。

「ドクがあんたに薬を仕込む機会がありましたか？　クリンさん——」

「俺は一度だけ用足しに部屋を出た。その時に仕込もうと思えば、たぶんできたはずや！」

「何時頃、用足しに？」

「二階堂のじいさんが部屋から出て……、すぐだ」

「そもそもおふたりは、わざわざ書斎までやって来て、何を話されていたのですか？」と、シドの唱えた台詞の抑揚が、ひととき高くなったが、

「いや。普通に世間話や——」と、クリンに軽くいなされた。

きまり悪そうに、シドがいった。「まあ、我々は警察ではない。これ以上の追及はしませんが、状況証拠はどう考えても、クリンさん——、あなたに不利であることは、疑いない事実ですからね！ところで、二階堂さん。すぐ警察に連絡してください」

「かしこまりました」

老人は一階におりていった。例のポーンという音が聞こえてきた。シドが思い出したように訊ねた。「モネさん。そういえば、あなた九時過ぎに広間の前をとおって、二階にいきませんでしたか？」

モネは一瞬、ビクッと細い肩を震わせたが、すぐに冷静な口調で、

「はい、そのとおりです……」と答えた。

「どちらまで行かれたのですか？」

「あの、二階堂さんに頼まれて、氷を取り換えに……」

「それで、どうだったのですか？」

「書斎の扉は閉ざされていて、中にははいれませんでした」

「何か、もの音や話し声とか、聞こえませんでしたか？」

「いえ——。あのお、ごめんなさい、わたし……よく覚えていません……」

モネが今にも泣きだしそうになったので、シドはこれ以上の詰問を断念した。

すこししてまた、エレベーターの到着音がした。廊下から二階堂老人が、「困りましたねえ。電話が通じません。こんなことは初めてです」と、困惑した顔つきでいった。ポチがポケットから携帯電話を取り出して、警察にかけようとしたが、こちらは画面に電波圏外の表示がされただけだった。

「ああ、携帯電話はこの島では通じませんよ」と、老人があっさりという、

「そうだったよな」と、ポチは舌打ちをした。

「しかし、固定電話が通じないのはおかしい……。何者かが回線を切断したのか？」と、シドはというと、キッとクリンを睨みつけた。

「——おい、お前か？」

「いったい、なんのために？」

クリンはムツとして反論した。シドの右手のこぶしが震えているのを見て、老人があわてていった。

「あさつてになれば、連絡船がここにやってきます。とにかく、それまではどうしようもありませんね……」

「このあらしで、船が予定どおり来てくれればいいのやけどな……」とクリン。

「いいかえれば、いくら犯人が逃げたいと思っても、ここから逃走することはできないということだな！」と、シドが大声で怒鳴った。

シドとクリンのやり取りにずっと無関心だったポチがいった。

「ココ姉にも事件を伝えといた方がよさそうだな。彼女は、今、どこ？」

「ココ様は、おそらくご自分のお部屋かと……」と、二階堂氏がいった。

「まさか、彼女の部屋は大地の間だろ？　ここですぐ隣じゃないか！　この騒ぎが耳にはいらぬのかね？」

ポチが不思議そうに聞き返すと、

「さようでございますよね……」と、二階堂氏も戸惑いながら返事した。

二階堂氏を先頭に、一同はココが泊まっている大地の間の前へとやってきた。まず二階堂氏が扉を叩いたが、反応はなかった。扉をあけようと試みたが、チェーンが引っかけて半開きで止まった。二階堂氏はその隙間から手をこじ入れると、壁にある電灯のスイッチを押した。部屋の中が明るくなった。

「ココ様。起きてください」と、二階堂氏が呼びかけたが、依然として反応はなかった。

「緊急事態だ！　この扉も壊そう」と、シドが意気込んだ。

「それでは、鎖を道具で切断いたしましょう。どうかドアを壊すこ

とはご勘弁ください」

そういうと、老人は下におりて、金属用のやすりを持ってきた。シドが隙間からの切断を試みたが、結局、チェーンを切断するまでに数分を要した。ようやく、一行はココの部屋にはいった。

ココはベッドで仰向けに寝ていた――。

「普通に呼吸している！　つまり、ただ寝ているだけってことさ」と、シドがいった。

「それでは、寝かせておいてあげましょう」と、老人が提案したので、みなはそとに出た。そして、二階堂氏が最後に扉を閉めた。

「じいさん。隣の白雪の間も見てみたいけどな」と、ポチが要望したが、

「申し訳ありません。あそこはユーノ様専用のお部屋でして、彼女しか鍵を持っていないです」

「ふーん。じゃあ、いわゆる『あかずの間』ということか……」

「そういうことになりますね……」
それを聞くと、ポチは満足そうに「もう遅いから解散にしようぜ」と背伸びした。

シドが眼を丸くした。「おい、その殺人の重要参考人をどうするんだよ。ほうっておくのか？」

「心配なら、あんたが見張っていれば？　大丈夫だよ。このあらしで、この島だぜ。――逃げたくてもどうしようもないじゃないか？」と、ポチは平然としている。

「でも、こいつがまた次の犠牲者を狙わない保証はないぜ……」

シドはクリンを睨みつけた。

「せいぜい、自室にチェーンでもかけておくんやな」と、クリンが捨て台詞を吐いた。

「シドのいうとおりになっちまったら、その時はその時――。おい、クリンのにいちちゃん。あんたは俺たちが指示するまで、自室に籠って一步も出ないようにしてくれよ。そのくらいはできるだろう？」
と、ポチがクリンに指図すると、

「別に俺はかまわんよ。もつとも、俺は犯人じゃないけどな。こいつは罠や！ 俺は罠にはめられたんや！」と、クリンがばやいた。すかさずシドが、「ふん。あんた以外にこの犯行ができるならば、ぜひその方法をご教授いただきたいね」と皮肉った。

クリンは舌打ちをひとつして、自室に戻っていった。

悔しそうな顔をして、シドがいった。「本当にどうなっても知らないぞ！」

「まあまあ、みなさん。もう遅いことですし」と、二階堂氏がなだめた。

「もうひとつだけ、確かめておきたいことがあるのだけど」とポチ。「何でございましょう？」

「台所を拝見したいです」

二階堂氏とモネが互いに顔を見合わせた。シドが怒っていった。

「おい、チビ助——。何が狙いだ？」

「心配するなよ……。どうせこの事件は、他人に嫌疑をかけないようにわざわざ用意周到に密室を作り上げてから実行された、愚かなクリンによる犯行か——、足を滑らせて運悪く大理石に頭をぶつけて勝手に死んでしまった、間抜けなドク自身による事故か——、のいずれかに違いない！ 今、俺が調べたいのは全く別のことさ」と、ポチは無表情で答えた。

「別にかまいません。ポチ様が納得されたいことがあるのなら、いっしょに確認しておきましょう」と、二階堂氏は快く承諾した。

ポチ、シド、モネと、二階堂老人の四人が厨房に向かった。厨房に行くためには、一旦食堂にはいり、さらに食堂の西側にある扉をとらなければならない。

厨房には、巨大な冷蔵庫と電子オーブンレンジに、本格調理用のガスコンロが数台用意されていて、ほかにもありとあらゆる調理器具が、全てそろっていた。

「まるで、一流レストランの調理場だな……」と、シドが感心しな

がら、冷蔵庫の扉をあけてみた。そこには七人の胃袋を優に三日は賄えそうな、様々な食材が詰め込まれていた。

「へー、モネちゃんって、結構、几帳面ですね。この林檎の皮、きれいにつながっているよ!」

生ごみ入れに捨てられた林檎の皮を手にとって、ポチが感心していた。

「おい、チビ——。お前が調べたいことって、いったいなんだ?」
「いよいよ、シドは焦れてきた。それを無視してポチは、

「ふむ。捨てられた林檎の芯が八つということは……、ひとりで八個も林檎をむいたんだ、モネちゃんは——。よく我慢できたね」と、モネをほめた。

「ええ。あたしって、いつもひとつのことに、つい夢中になってしまふの……」

そういうと、モネは顔を赤らめた。

「おい、チビ。俺の話を聞いているのか?」と、こらえきれずにシドが怒鳴った。

「ああ、わかったよ……。じいさん、さっきいていたアスコルなんとかっていう溶液は、どこにあるの?」

「アスコルビン酸ナトリウムですね。俗にいうビタミンCのことです。こちらの瓶にはいつています。わたしどもはいつも林檎の酸化防止剤として利用しています」

老人は、ポチに透明な液体のはいつた大きなガラス瓶を手渡した。
「へー、こんな溶液なんだ……」

ポチは興味深げに瓶をのぞき込み、蓋をあけてにおいを嗅ぐしぐさをした。

「おいおい、たったのそれだけかよ!」

シドはがっかりした様子だ。

「おいおい、わかってないなあ。こいつは今回の事件の鍵を握る重要事項だぜ!」

「ふん。まるで探偵気取りだな。ミステリーの読みすぎじゃないの

か？」と、シドがやり返した。

三人が、厨房から広間へと引き返していったが、ただひとり、ポチだけがこっそりと厨房に居残った。彼はきよきよと見まわして、周りに人がいないことを確認した。やがて、棚の上にあつた空になった広口のガラス瓶を見つけると、彼はそれを手に取った。ふたをひねって瓶をあけると、彼はその中に、厨房にあつたあるものを、注意深く挿入した。ふたをしつかりと閉めると、彼はガラス瓶をふところにしのばせた。誰から見られていないことを再度確認したポチは、ほっとため息を吐いた。どうしても手に入れたかったものを、手に入れたのだ。ポチは白い歯を見せて笑った。

広間では、シドが大きく深呼吸をした。「もう、一時をまわっているのか？　ところで二階堂さん、あなたは今晚どこで寝るのですか？」

「わたしは、この部屋で……」と、老人が答えた。

「それじゃあ、邪魔しちゃいけないな。モネさんも、そろそろ部屋に引き上げましょうか」と、シドが提案した。

「あら、ポチさんが戻ってませんよ。まだ厨房にいるのかしら？」
モネが心配すると、まもなくポチが広間にやってきた。

「お前、何していたんだ！」

シドが怒っていった。

「うん。ちよつとね……。じゃあ、遅くなつたし、そろそろ寝よつか」

そういうと、ポチはすたすたと自室に引きさがった。

「それでは、我々も……」

二階堂氏ひとりを残して、シドとモネも広間をあとにした。

シドが泊まる月光の間の前で、メイド姿のモネが愛らしい笑顔をしながら、おやすみなさいと小声であいさつした。シドは軽く手を

振って答えた。両手を前で組み背筋をピンと伸ばしながらエレベーターを待つモネの横姿は、清楚でとても美しかった……。

ベッドにはいったあとも、シドはなかなか寝つかれなかった。書斎の扉を破壊するために酷使した全身はズキズキ痛むし、不可解な謎に悩まされた脳みそは混乱を極めていた。密室だと思われた事件現場は、暗室の中にいたクリンの存在により、全くナンセンスなものとなった。

「あいつの所為で台無しだな……！」

昔からシドは頭脳労働に憧れていた。警察がさじを投げてしまった難事件を解決する名探偵などは、まさにシドの究極の理想像でもあった。もしも今夜の書斎が完璧な密室であれば、その謎を解明することで、愛らしいモネの尊敬を得ることができたかもしれない。

それにしても、クリンとは実に不思議な男だ。わざわざ犯行現場を密室にしておいて、自分だけが現場に残るなんて、まともな頭脳の持ち主がすることではない。そもそも、クリンがドクを殺さなきゃならない動機なんて存在するのか？ 初対面の見ず知らずの人間を殺して、何か得があるのだろうか？

「何としても、その動機をこれからひねり出さなければならぬ！」と、シドは心に誓った。

その時、近くの部屋で扉の閉まる音がした。方向から察するに、おそらくポチの火炎の間だ！ こんな遅くにポチは部屋から出て、いったい何をしてきたのだろうか？

シドはポチという男について考えてみた。絶えずシドの先まわりをしていると思い込んで、いつもしたり顔でいるポチ……。おそらく、俺のことは愚直な堅物だとも思っているのだろう。シドの口もとがかすかに緩んだ。しかし、俺はやつが知る由のないある事実を知っている！ そして、今夜の犯罪でそれが重要な役割を担っていたことも……。

その後も、寢床の中でシドは、自身が抱える疑問の追及を行って

いたが、やがて深い眠りへと落ちていった。

6・第二の事件

翌朝、厨房には食事の支度に切磋琢磨する二階堂老人とモネの姿があった。シドが大広間に現れると、モネがやってきて、

「すみません。お食事の準備、もうすこし待ってくださいね」と、ぺこりと頭を下げた。

「いいよ、きのうは遅かったし……」と、シドは歯を見せた。モネはうれしそうにほほえむと、厨房へと戻っていった。

しばらくすると、ココが起きてきた。「おはよう……。よく眠れた？」

憐れむようにシドがいった。「どうやら、まだ知らないようだね。昨夜、ドクが死んだよ……」

「はあ……？」

「ドクの死体が書斎で見つかったんだ。あんたはぐっすり寝ていたようだね」

ココは一瞬、細い眉をつり上げたが、すぐに冷静さを取り戻した。「なるほどね——。それであたしの部屋のチェーンが壊されていたんだ」

「ずいぶんと察しがいいじゃないか？」

「何よ！ あたしが犯人だともいいたいのかしら？」

ココはシドをキツと睨んだ。

「いや、犯人は確定しているよ。クリンさ——」

気をつかって、何気なくシドはいったつもりだったが、

「まさか……。クリンさんが？ 信じられないわ……」と、意外にもココは、いつになく激しい動揺を見せた。

そこにポチが大あくびをして、広間にやってきた。

「やあやあ、みなさん、お早いことで——。おや、ココ姉——。きのうは本当によく寝ていたね……」

「そうね。あたしらしくもなかったわ……」

「夜の出来事は、シドから聞いたかい？」

「うん——。ところで、クリンさんは今どこにいるの？」

シドが「自分の部屋じゃないのか？」というと、

「あなたたち、彼をひとりにしたの？」と、ココはあきれていた。

ポチが平然といい放つ。「別に、ここは離れ小島だし……。逃げたくても逃げることは無理だしね……」

「しかし、どうも嫌な予感がする……。ちょっと、見てこよう」と、シドが提案した。

シドを先頭にポチとココの三人がクリンの部屋に向かった。エレベーターが二階に到着してポーンと鳴った。三人は手前から二つ目に位置する森林の間にやってきた。

シドがノブに手をかけると、扉はあっさりとあいた。

部屋の中には誰もいなかった。ただ、南の窓があいていた。雨は降っていなかったが、風はまだ荒れていた。その風が吹き込んだ所為なのか、室内の小物が散乱していた。机の上のマッキントッシュの電源がオンのままになっていた。

「誰もいないか……」

シドがそういった直後——、甲高い女の悲鳴がした！ ココが窓から下をのぞき込んでいる。ポチとシドが傍までやってきた。

白雪邸の二階は、通常の建造物では四階相当の高さがある。さらに、この部屋の真下は固いコンクリート地面になっていた。そこにクリンが仰向けになって大の字で転がっていた。昨晚のドクと、まさしく同じような格好で……。

「ここから——、転落したのか！」

シドは窓から上半身を大きくのり出した。窓わくは思いのほか低くなっていて、シドの腰の高さほどしかなかった。

「今、あんたをつき落そうと思えば、たやすくてできるな……」と、ポチが不謹慎な冗談を耳元で囁いた。シドがキッと睨み返したが、相手にせずにポチは机に向かった。ポチはしばらくじっと机上のノ

ートパソコンを見つめていたが、やがて思い出したかのようにマウスをさっと動かした。すると、スリープ状態が解除されてディスプレイが明るくなった。そこには文書ファイルが開かれたままの状態になっていた。そして、次のようなメッセージが書き込まれていた。『正常な精神において、責任をとって、われは自害を選択す——。クリン』

シドは頭を抱え込んだ。窓からそとを見わたすと、手前に丘があり、その先には海が広がっている。ねずみ色の暗雲のわずかな隙間から零れた日光が、大海原のほんの一部をダイヤモンドのように煌々と照らしているのが見えた。

混乱を極めているシドのうしろから、「とにかく、階下^{した}に行こう」と、ポチが声をかけてきた。森林の間をあとにした三人は、二階のエレベーターの前にやってきた。

「ここから近道をしようぜ」

ポチが東の非常口のドアをあけると、シドもそれに続いた。

「あたしはおじいさんを呼んでくるわ——」

ココはそういつて、その場でエレベーターを待ち続けた。

ポチとシドはクリンの遺体の傍にやってきた。クリンは口をポカんとあけたままで、眼球はカッと空を睨んでいた。後頭部からじかに地面にぶつかっただらしく、頭がい骨が割れて、血が四方にとび散っていた。しばらくして、二階堂氏とモネのふたりが駆けつけてきた。ふたりはすこし離れた所で立ち止った。

だいぶ遅れてココが息を切らしながらやってきた。

「はあはあ、急にいなくなっちゃったから、見失ってしまったわ……」

……

「申し訳ありません。わたしたちは一階の非常口からまいりましたので……」と、老人が謝った。

「そういうことか。あたしだけが玄関から大まわりしてきたのね！」

と、ココはなげいていた。

「残念だけど、やつこさんが生きている可能性はゼロだね。遺体はこのまま警察が来るまで放置せざるをえないだろう……」と、シドがいった。

やむを得ず、五人は白雪邸に戻ることにした。

途中、老人が一階の非常口から邸内にはいるうとしたのを見て、ポチが訊ねた。

「ちよつと、じいさん！ そのドア……、そこからあけられるの？ くしゅん」

「ああ、完全に閉めきつてしまえば、そこからはノブがまわせないので、あけられませんよ」といつてから、足元にしゃがみ込んで、何かを拾った。その小さな物体をポチに見せて、

「ほら、この木片をそとに出る時に挟んでおけば、ドアは半開きの状態になるので、ノブがまわせなくても引くだけで、そこからドアをあけることができます」と説明した。

「なるほど、さっき出るときに、この木片をドアに挟んでおいたというわけだね。くしゅん」

花粉アレルギーのポチは鼻を押さえながら、木片を老人に返した。このやり取りをずっと見ていたシドは、苦虫を噛み潰したような顔をした。

五人はそのまま食堂にはいつて朝食をとったが、誰もがあまり食がすすまない様子であった。

ようやく食事を済ませると、シドは真つすぐトイレにいった。

「さっきの老人のやり取りで、ポチも非常口のからくり知ってしまった。俺のアドバンテージは完全になくなった……。ということは、クリンがとった一連の行動を、いち早く説明しなければならぬ状況に、俺は追い込まれたことになる！」シドは、ぶつぶつとひとりごとをばやいた。

用を済ませてから、何気なく白雪姫とこびとたちの像の前まで、

シドは足を運んだ。美しい白雪姫の像を眺めながら、モネのイメージを重ね合わせていたその瞬間——、シドの背筋は一瞬にして凍りついた！

七人いるはずのこびとのうち、ふたりのこびとの頭部が割れて、なくなっていた……。シドはあわてて絨毯に落ちていた陶器の破片を見つめた。ひとりには眼鏡をかけていたこびとで、もうひとりはおひげのないこびとの像だった。

「どうしたの——、シドさん……」

気がつく、いつのまにかココが傍に立っていた。シドが壊されたこびと像を指差すと、彼女は急におどおどしはじめた。

「まあ、恐ろしい……。なんてことなの？」

「どうかしたのですか？」

「シドさん。白雪姫に登場する七人のこびとたちの名前は、ご存じ？」

「いいえ、全く……」

「ドック、グランピー、スニージー、スリーピー、ハッピー、バツシュフル、ドーピー、——の七人なの」

「そうですか……。それで、壊れてしまったこのふたりは誰なのですか？」

「丸眼鏡をかけたこびとが『ドック（先生）』、おひげのない丸坊主のこびとが『ドーピー（おとぼけ）』よ！」

察しの悪いシドも、ようやく事態を理解してきた。一連の事件に何らかの統一意志が存在するかのような、あまりにも残酷で、悪魔じみているこの趣向を——、

連続殺人事件……！

「そういえば、あのポチって子、油断しない方がいいわね」と、ココが囁いた。

「どうということ？」

「さつきクリンさんの部屋で、あの子、何かをくずかごから取り出してポケットに入れたのよ！」

シドは驚いた。自分は動転していて全く気づいていなかったからだ。

「やつが何を持って行ったかわかりますか？」

「さあ——？ 何やら小さな薄紙を丸めたようなものだったけど……」

シドは白雪姫の像をじっと睨んだ。美しく無表情な白雪姫は、物憂げにどこか遠くを見つめているようにも思えた。

今、この屋敷には五人の人間が生き残っている。そして、壊れていないこびとの数もちょうど五つだ。そして、ユーノはまだ姿を現していない——。

「まさか、これだけで済まないのだろうか……？」

あたかも、ココに聞いてもらいたいかのように、おだやかだが、はつきりとした口調で、シドはひとりごとを唱えた——。

6・第二の事件（後書き）

このお話で登場する「白雪邸」の見取り図を、HPブログで公開しております。

<http://irisgabbesilmame.com/e1074954.html>

邸内の見取り図は、この小説を楽しむために、かなり重要な役割を担うことになりますので、ぜひご参考にしてください。

7・読者への挑戦

あらしが吹き荒れる絶海の孤島に、ひっそりとたたずむ白雪邸――。そこで、奇怪なふたりの変死体が発見されました。六人を招いて催されたネットゲームのオフ会は、肝心の主催者が未だ姿を現さず、さらに、招かれた客人はいずれも、ひと癖ふた癖ありそんな人物ばかりです。

現場に残された数々の状況証拠と手がかり――。登場人物のおかしな行動を、ひとつひとつ、丁寧につなぎ合わせていけば、おのずと真相が浮かび上がるはず。果たして、この事件の真相は……？

この先を、あわてて読み進める必要はありません。あたたかい紅茶でも入れて、ここでもう一度、じっくりと考えてみるのも一興です。ぜひ、みな様の鋭い頭脳を生かして、真相を解明してください。

アイリス　ゲイブ。

7・読者への挑戦（後書き）

これで、『白雪邸殺人事件（出題編）』は完結です。続編の『白雪邸殺人事件（解決編）』は、ただ今準備中です。もうしばらく、お待ちください。6月になる前に、なんとか、みな様に公開したいと思っています。

アイリス ゲイブ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2108s/>

白雪邸殺人事件（出題編）

2011年10月4日21時56分発行